

概 要 報 告

実施期日	8月5日(月)
部 会 名	小学校 社会部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『問いをつなげる子どもたちをめざして』

提案概要

第4学年「地震にそなえるまちづくり」の学習を通して、神奈川県研究主題の「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」およびテーマの「問いをつなげる子どもたちをめざして」に迫った実践である。その中でも特に課題の解決に向けて児童の興味・関心から生成された問いを追究する学習活動の実施を目指した。以前から校内研究で生活科と総合的な学習の時間を中心に行ってきた探究する活動を、社会科でも同様に行えるのではないかと考え、防災の単元で取り組んだ。本提案においては、身近な地域で起きた災害の様子を知ること、児童が災害を自分ごととしてとらえることができ、それにより個々の疑問や問いが生じ、その課題を追求することでさらに新たな問いを見出し、問いをつなげていけるのではないかと考え、実践を進めた。社会科の授業づくりにおいて、教科書をベースに知識を得る活動が中心になっていることに課題を感じ、子どもたちの興味・関心や思考の様子を丁寧に見取り、そこから学習活動を展開するようにした。

本単元は、地域の関係機関や人々が、自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、様々な備えをしていることを理解させることをねらいとしている。

大地震を経験したことのない児童たちが自然災害への対処や備えについて、自分ごととして考えられるよう、そして学びを追究し続けることができるよう学習活動を展開していった。そのためにも身近なところから問題に迫っていくようにした。家族へのインタビューや、元校長先生や地域の方、防災士の方等をゲストティーチャーとして招いて話を聞くなどの活動を行うことで、過去に地域で発生した災害の様子を知り、地震の被害について、身近な問題としてとらえることができた。インタビューや実際に防災倉庫を見る活動を通して、自分たちが学んだことを伝えたいという気持ちを持つことができ、教科書の流れに沿った学習ではなく、身近な人たちから多くのことを学ぶことができた。

総合的な学習の時間と横断的にカリキュラムを組むことで、学びを追究し続けることにもつながった。社会科の指導要領の内容だけでは扱いきれない部分を総合的な学習に時間で扱うことによって、社会科としての学びも深まり、複数名の児童から変容を見取ることができた。

質疑応答

なし

協議の柱及び協議概要

『社会的事象を自分ごととしてとらえるには（方法、手段、手立て、見取り方など）』

実際に大地震を体験していない子どもたちにとって防災の学習を自分ごととしてとらえることは難しい。身近なことから課題に迫っていく必要がある。今回の実践では、ゲストティーチャーを招き、話を聞くことによって過去の震災の追体験をすることができた。教師が話をするだけでなく、実際に体験したことや、それに詳しい人の話を聞くことで児童たちにとって遠い存在であったことも身近なこととしてとらえられるようになる。これが社会的事象を自分ごととしてとらえることにつながる。

自分ごととしてとらえられたかどうかの見取りについては多くの考えがあげられた。その中でも、単元を通しての振り返りで見取るやり方について意見が多くあがった。今回の実践であれば、単元が始まる前と終わった後でのアンケート結果や、抽出児の意識の変化がこれにあたる。学んだことを自分の生活の中でどのように生かそうとしているかということ授業ごとにワークシートやノートの記述、発言などから丁寧に見ていく必要がある。

まとめ概要

研究主題の「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」について

総則編の「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」の社会科の具体的な配慮事項には「学習の過程は成果を振り返り学んだことを活用することなど、学習の問題を追及・解決する活動の充実を図ること」とある。この観点において、本実践では「授業展開を常に子どもの気づきからスタートさせていること」「問題を解決するべく体験やゲストティーチャーの話を絶妙なタイミングで授業に組み込んでいること」「子どもたち自信が振り返り学んだことを活用していること」が重要なポイントとしてあげられる。

児童の振り返りやワークシートの記述から、地震災害に対してただ「怖い」という思いから「自分たちで助かる方法を考える」意識の変化が見られる。困難を乗り越える力を着実に身につけている。地域の人から防災倉庫の状況について教えてもらう授業では、自分たちが実際に避難する際必要なものに目を向けて考え、防災についての意味や価値を見出し改善策まで考えていた。実物に触れ体験を重ねることで、自分ごととしてとらえることができるようになってきたのではないかな。

児童たちが学びの課程を振り返ることができた要因の一つとして授業者の声かけがあげられる。所々で机間巡視しながら過去の記述等を思い出させるような声かけをすることで、振り返りがしやすい環境を作っていた。丁寧に児童の声に寄り添って進めることも社会的事象を自分ごととしてとらえるための大切な手立てといえる。

単元について

この単元は、この後社会科として学びの継続のない単元である。この後の学びの継続先は、特に中学校では情報や保健体育、技術家庭科、特別活動において入ってくる。これからの継続的な学びということを考えたときに、本実践を通して防災を自分ごととしてとらえることができたことは重要なことである。ここで学んだことがこれからの学びの中で、そして生活の中で生かされていくであろう。また、社会に開かれた教育課程を実現していくためにも重要な単元である。地域の人たちと一緒に学んでいくことで、学校教育を超えて地域で子どもを育てていくことにもつながる。